

## 「さきたま」の地名由来

埼玉古墳群の主は、「笠原氏」のようだ。『日本書紀』安閑天皇元年に勃発した武蔵国造争乱記事には、「武蔵国造笠原直使主興小杵相争国造」とある。武蔵国造歴代の墓所が当古墳群であるとすればの話ではあるが……。そして、もう一つの根拠は、稻荷山古墳出土の鉄剣銘文による。これによれば、磯柳の被葬者乎獲居の父が「加差披余(カサヒヨ or カサハヨ)」と記されており、笠原と加差披余が同一名称となる可能性を含んでいる。それでは、なぜ鉄剣や争乱記事に「前玉(サキタマ)」が登場しないのかということであるが、その答えは簡単で、未だその地名が成立していないからである。

「さきたま」の名称由来には、2つの説がある。先(前)多摩説と幸魂(さきみたま)説である。先(前)多摩説は、南から見れば「多摩」の先に存在するというものである。しかし多摩の先には多くの地域が存在しており、当地がその地として特定される理由はない。なお、「さきたま」は「前玉」であり「先」とは、方向的に逆である。つまり、これは方便的な説と言わざるを得ない。それでは幸魂説は如何であろうか。幸魂とは、「幸福をもたらす神」ということであろうが、何を以ってこの地の名称にしたのであるのかその根拠が分からない。なお、敏達天皇は575年に幸玉宮さきたまのみやに遷宮している。これと当地の「埼玉」が関連するとは考えられないが、「さきたま」が当地独自のものでないことがわかる。

ところで「前玉」は、神亀3年(726)の山背国戸籍帳(正倉院文書)に「武蔵国前玉郡」と見えるのが初見である。同じ頃、万葉集にも「前玉(佐吉多万:サキタマ)」の文字が見える。そして、10世紀になると「埼玉」の文字とともに「佐伊太末(サイタマ)」と記され・読まれたことが和妙類聚抄によってわかる。

前多摩説も幸魂説も根拠に乏しいように思える。つまり「前玉」の地は、行田市埼玉であり、そこには埼玉古墳群が存在する。「前玉」の名称は、この埼玉古墳群の存在に由来するものと考えたい。この地は、その後「前の(偉大な)魂が鎮められている場所」として認識されたのではないだろうか。そこからこの「前の魂(サキノタマ)」を「前玉(サキタマ)」として表現し、それが地名に転化したのではないだろうか。埼玉古墳群が展開していた頃の当地の地名をあえて推定すれば、それは「笠原」であったのであろう。鎮魂の社は、在地の前玉彦命と前玉姫命を祀る式内社前玉神社である。(中村倉司)

